



染症対策や段ボールベッドの組み立て、非常食の準備などを行いました。夜間には停電を想定し、懐中電灯を使って二人一組で校内の巡視訓練を行いました。

救護班の小田桐舞佳さんは「HUGや非常食のアルファ米を食べる経験は、こういう機会がなければできないので、貴重な経験をしました。実際に避難所を運営することになったら、自分たちが学校の中のことを一番よく知っているので、率先して動くようにしたいです」と話していました。

翌31日は、釧路西消防署白糠支署の小貫雅範主任と森脇一斗主任を講師に、救急講習を行いました。生徒たちは、けがをした人や意識がない人の搬送方法、熱中症や低体温になったときの応急処置などを学びました。

小貫主任は「皆さんにもできることはたくさんあります。今日学んだ知識を生かして、災害時に困っている人がいたときは、助けられる人になってください」と話していました。

福原校長は「初めての試みでしたが、実際に災害が起こったときのシミュレーションができたことは、生徒にとって良い経験になったと思います」と話していました。

## 白糠中学校防災授業

10月28日、白糠中学校（佐藤毅校長）で生徒や地域住民が参加した防災授業が行われ、避難訓練や講演を通して防災の知識を深めるとともに、防災意識の向上を図りました。

避難訓練には生徒78人と地域住民12人が参加。巨大地震により校内で火災が発生、津波警報も発令されたとの想定で、生徒には事前に知らせない「抜き打ち」で実施されました。参加者は避難指示が出されると校舎西側の裏山にある津波指定避難場所へ走って避難しました。

参加した地域の方は「以前は、避難道が砂利道で休み休み歩いていましたが、今は整備され勾配もゆるやかになり、とても歩きやすくなりました」と話していました。

訓練後は、北海道大学広域複合災害研究センターの岡田成幸教授が「防災の自助・共助・公助について」と題して講演。岡田教授は「地震発生後3秒間は自分を守る自助、3分間は家族を救う共助、3分～30分は避難、3日間には地域住民と協力して生き、その後に公助がくる。公助までの時間、自分たちは何をしたらいいのかを考えてください」と述べました。

有間千晴生徒会長（2年）は「改めて自然災害に対する意識が高まりました。白糠中学校は海や川から近いので、今日学んだことを生かしていきたい」と話していました。



写真上／津波指定避難場所へ走る生徒と地域住民  
写真下／「防災の自助・共助・公助」をテーマに、スライドを使って講演する岡田教授（左）